

2022年8月26日

## 2022年度奨励賞審査報告

日本教育学会奨励賞委員会

### 【授賞論文】

宮本勇一「プロイセン教育改革期の教育改革論争点としての「教育的教授」」『教育学研究』第88巻第2号、2021年、171-183頁

### 【授賞理由】

本論文は、「教育」と「教授」（あるいは「道徳性」と「知性」）の関係という教育学の基本的テーマについて、19世紀初頭のプロイセン教育改革期の「教育的教授」をめぐる議論の検討を通じて迫り、さらに、「教育を改革するとはそもそもどういうことか」というメタ的な問いにも答えようとする論考である。

「教育的教授」はヘルバルトの教育哲学における重要概念であったことから、先行研究では主としてヘルバルト研究の一環でこの概念が検討されることが多かった。これに対し、著者はその視野を広げて、ヘルバルト『一般教育学』発刊以前（トラップ、ニーマイヤー）と以後（グラッフ、フンボルト）における「教育的教授」をめぐる議論の変遷を俯瞰したうえで、近代的な学校の制度設計が本格的になされた19世紀前半のドイツで「教育的教授」論のバリエーションを示すことにより、これまでの学説史を捉え直すことに成功している。

さらに、こうした教育改革言説の移り行きを紐解くことで、「教育的教授」を例としながら、「教育学自らが火付け役と火消し役」を担っていく教育改革の自己言及的レトリックを浮び上がらせている点も興味深い。

このように、歴史的な研究であるとはいえ、本研究は、教育改革の論理を読み解くための有効な手立てや現代を理解するための適切な分析視角を提供してくれるという意味で、プロイセン教育改革期研究への示唆には汲み尽されない大きな学術的な貢献を果たしている。

一方で、次のような指摘もあり、今後のさらなる研究の発展が求められる。本論文では、ヘルバルトの思想において念頭に置かれていた教育が主として個別指導的なものであったのに対して、フンボルトらが検討したのは学校という一斉教授の場における教えと学びであったことに注目している。教育の学校化という観点から「教育的教授」がどのような可能性と困難性を有していたかを論じるその延長線上で、教育にとって学校とは何かをさらにより本格的に論じることも可能であろう。

また著者は、ルーマンによる教育改革の社会学的検討に対して、教育学にレリバントな知見の欠如という点から批判するとともに、ルーマンの理論を超えていく教育改革論を示そうとしている。この点については、本論文がドイツ思想史研究の枠を越え出て、教育改革の論理の構図をあぶりだそうとする野心的な試みであることが評価された一方で、ルーマンのシステム理論に関する理論的検討がやや不十分ではないかとの意見も出された。

もっとも、これらの点は、著者の今後の研究への期待の高さを示すものでもあり、本論文の意義を損なうものではない。

このように、本論文は、テーマの普遍性、知見の新規性、論の展開の重層性、今後の発展性の観点から、日本教育学会奨励賞にふさわしい研究として高く評価できる。